

戦後の小松市政と天皇の来松

昭和二十二年（一九四七）一月、大政翼賛会小松支部長の職責を理由に初代市長山口又八（十六年一月就任）が公職追放された。四月、初の公選市長選がおこなわれ、和田傳四郎（戦前市会議長）が当選した。また、同月末の市議選で三六人の議員が誕生した。戦前市会議員の候補者二人のうち当選したのは一人で、三分の二以上が新

人であった。戦後の小松市政は体制を一新して開始された。市政は市民生活の再建を最緊要課題とした。悪性インフレでヤミ米価格が暴騰するなか、市は割当供出米を完了した農家に衣料やたばこ・酒など生活物資を優先的に配給した。結果、地域の供出量は毎年一〇〇%を超えた。戦災者（二十一年七〇九世帯二二一六人）、引揚者（二十二年末七五四世帯二一〇四人）への支援も怠りなかった。



小松市役所(昭和27年) (小松市立博物館提供) 耐震耐火鉄筋コンクリート地下1階・地上3階、敷地3960 m²・建坪1721 m²・延坪5092 m²、総工費7680万円



和田傳四郎銅像(小松市立公会堂前) 昭和22年(1947) 4月～38年4月まで連続4期16年市長在任、45年5月に初代名誉市民となる。同年10月死去、享年93歳

引揚者（二十二年末七五四世帯二一〇四人）への支援も怠りなかった。市は板津（梅田町）の小松製作所社員住宅一五一戸を買収し、市営住宅に改築して収容した。

だが、二十三年、財政赤字の補填を目的に板津を含む市内二四八戸の市営住宅売却が決定されると買収資力に乏しい居住者と紛議を生じた。市営住宅はその後安宅町や梯町などで新設され

た。また、ドッジ・デフレの失業対策として市は二十四年九月に小松競馬場の池の埋立工事をおこない、二十五年二月から延べ一万二〇〇〇人を雇用して競馬場跡地に末広公園総合運動場を造成した（三十一年八月完工）。

戦後の地方行政は自治権限の拡大にともなう事務量の増大に対応しなければならなかった。和田市長は職員を増員するとともに手狭となった市庁舎の新築に着手した。二十五年八月に起工、翌年十二月に竣工した新庁舎は、市政発展の司令塔となった。また、厚生・



小松市立病院(昭和25年)(小松市立博物館提供)県厚生農協連合会小松病院(東町)を買収して開院。昭和32年4月に国民健康保険市立小松病院(相生町)に移転するまで開業

教育面の公共サービスも拡充された。

二十五年十一月、市立病院が病床二五床、内科・外科・産婦人科・皮膚泌尿器科・放射線科の五科、職員二一人の体制で開院した。二十八年三月には庁舎内に併置されていた市立図書館が芦城公園内に移築され、独立館として開館した。

敗戦後の経済混乱のなか生活再建に苦しむ市民を大きく勇気づけたのは昭和天皇の来松である。第二回国民体育大会（二十二年十月三十日開会、金沢市）臨席に先立ち、二十八日に小松入りした天皇は、

今森久次郎絹織場（新町）を視察したのち稚松小学校での奉迎式に臨まれた。一万



昭和天皇来松奉迎式(昭和22年)（「小松の軌跡」より）
和田市長の発声で約2万人が万歳三唱して奉迎

余の民衆と面前した天皇は、戦時中の労苦をねぎらい、国土再建への励ましの言葉をかけた。五分間の奉迎式は笑顔で手をふって歓迎に応えた「人間」天皇のすがたを民衆のまぶたに焼きつけた。式終了後、一老婆が奉迎台に駆け寄り、天皇の靴底の砂跡を拝んだあと砂を寄せ集めて紙に包んで懐に入れた。この様子を見ていた人々は我も我もと奉迎台に押し寄せ、またたく間に台上の砂を拭き取ってしまった。民衆が天皇崇敬の深い情念を表出した瞬間であった。（太多 誠）



今森絹織場を視察される昭和天皇(昭和22年)(小松市立博物館提供)
今森絹織場は明治30年代創立、昭和5年に新町移転。天皇視察時は力織機170台、男子工員10人を雇用して操業